

2010年9月17日

国土交通省中部地方整備局長
富田 英治 様

市民による豊かな海づくり大会実行委員会
代表 粕谷 志郎 ・ 辻 淳夫

長良川河口堰のゲート開放に向けた公開質問・意見書

日頃の河川行政推進のご努力に敬意を表します。

私たちは今年6月「第30回全国豊かな海づくり大会ぎふ長良川大会」が「清流がつなぐ未来の海づくり」をテーマに岐阜県で開催されることに期待しておりました。しかし、本大会は市民が強い関心を示している長良川河口堰（以下「河口堰」という。）問題には触れようとはしませんでした。私たちは、と海を断絶した河口堰を無視したままで「清流がつなぐ未来の海づくり」はあり得ないと考え、長良川流域や伊勢湾などで活動する9市民団体と個人が実行委員会をつくり「市民による豊かな海づくり大会」を6月6・7日に開催しました。

この大会には幅広い市民、漁師、研究者などが参加し流域と海の実態を議論し体感し合うとともに、未来につなぐために「当面、河口堰のゲートの速やかな開放」を求めるアピールを採択し菅首相に送りました。新聞各社も積極的に「長良川」、「アユ」、「河口堰」をテーマに特集を連載し市民の期待に応えました。

河口堰が運用されてから15年。漁獲量は激減し事態は深刻です。鵜飼にも暗い影を落としています。ゲート開放は喫緊の課題になっています。長良川水系の7漁協は「ゲート開放」を求める要望書を取りまとめる状況にあります。岐阜市長は5月の記者会見で「ゲート試験開放、有効」との見解を示しています。また、中部経済界にもゲート開放を待望する動きがあることをマスコミは報道しています。

先週、前原大臣が記者会見で「水質汚染やヘドロがたまっている」「今のままのやり方を続けるのがいいとは思わない」と述べたとおり河口堰は環境を悪化させ生態系に大きなダメージを与えてきました。ゲート閉鎖を続けることは、10月に名古屋で開催されるCOP10の趣旨に真っ向から逆らうものです。

そもそも河口堰は水資源機構（旧公団）が建設し管理する水資源開発施設です。しかし、一番大きな目的であった工業用水は一滴も使うアテはありません。工業用水会計による建設費の償還の目途もありません。上水道は一部使われていますが、受水地域である知多地域からは「まずい！元の木曽川に水源を戻せ」の声が広がっています。北勢地域は河口堰の水は使っていません。中勢地域は「北勢工業用水から受水」しているのが実態で、長良川を使わなければならない理由はありません。河口堰の最大の目的は破綻しています。

ゲート開放を求める声は、高まっていますが、国は無視してきました。しかし、河口堰運用15年で、長良川の生態系に及ぼす破壊的影響も明らかになりました。「治水効果」もほとんどないことも明らかになりました。

明らかになった事実に基づき、私たちは「ゲート開放に向けた速やかな取り組み」を国に強く求めます。それでも「開放しない」と主張されるなら、以下に述べる質問・意見に対する回答・反論を公開して下さい。また、説明責任を果たす立場で公開討論の場を設けて下さい。

記

以下の質問・意見に関わる趣旨・解説は、末尾に記述しましたのでご覧下さい。

・利水について

- (1) 運用 15 年に至る今日、最大目的である工業用水に使われていません。長良川河口堰建設を進めた立場である貴職は、このことについて、どのような見解に立っておられますか。また今後どのようにしていく意向ですか。
- (2) 上水道について、水需要の減少から長良川河口堰の水を使わない水運用は可能（愛知県水については木曾川大堰からの取水に戻す。中勢地域についても長良川取水を中止しても施設の運用に支障はない）と考え、河口堰の開放を求めます。堰の全面（常時）開放を前提に、利水上の支障があれば、利水事業別に具体的に挙げて下さい。

・環境、生態系、産業への影響について

1．長良川の漁業被害（漁獲量の減少等）について

- (1) 行政側の発表でも新聞報道等でも、今年の長良川漁獲量は最悪の状態です。この原因をどのように考えられますか。
- (2) 長良川の漁獲量の減少、アユの小型化は、明確な事実です。多くの漁民などが「河口堰の影響だ」と言います。貴職のご見解はいかがですか。
- (3) 魚類が海に降下する時期、海から遡上する時期だけでも河口堰のゲートを開けることは効果的だと考えます。漁業者の切実な要望があります。貴職はこのような時期を指定した試験的ゲート開放を検討されていますか。検討されているのならその内容を答えて下さい。検討されていないのであれば、検討されない理由をご説明下さい。

2．生態系への影響

- (1) 河口堰上流域における河口堰運用前後のヨシ原面積の変化について数値を示し、回答して下さい。また、ヨシ原消滅の原因と生態系に与えた影響について説明して下さい。
- (2) 河口堰直上下流の底質について、貴職も含めて「調査」を実施し、発表しています。その資料からも、「生物が棲息しにくい貧酸素の底質」であることが浮かび上がってきます。貴職は現状をどのようにご認識ですか。
- (3) ゲートを開けて潮汐流が回復したとき、底層水の酸素条件は改善されヤマトシジミ個体群は急速に回復すると考えますが、貴職は回復すると考えますか。回復しないと考えるならその理由を答えて下さい。

・塩害について

- (1) 「塩水がより上流まで遡上する」として、建設当時示された『長良川河口堰に関する技術報告書』1992年4月 建設省を見ると、塩水遡上のシミュレーションの条件として、科学的に疑問な点がみられます。

弱混合と強混合は二分法（二者択一）的なものか

塩分濃度につき、弱混合時には上層では0 mg/L、下層の塩水楔部分では18,000mg/Lと仮定しているが、その仮定は実際の観測によって裏付けられたものか

上記報告書以後の調査研究の結果も踏まえて回答して下さい。

(2) 上記報告書で最も上流まで塩水が遡上するとされる状況は、河川流量や潮汐変化について、ごく限られた条件の際にしか起こりません。

このような塩水遡上の生起確率を新たに示して下さい。また塩害による被害予想額を示して下さい。

(3) 堤内の地下水と土壌の塩分濃度を、技術報告と同じ方法で推定するとしても、水稻の生育に支障(=「塩害」)を生じるような値にはならない、という試算があります。堤内の地下水と土壌の塩分濃度が塩害をもたらすという根拠を、数値と計算条件、実験、調査等のデータを明らかにして説明して下さい。

(4) 「長良川河口堰事業における漏水対策工の効果について」(1988年8月 長良川河口堰建設所)の「高須輪中漏水対策工概念図」を見ると、河川浸透水は耕作層の下で排除されることとなります。すでにこの「漏水対策工」が施されている以上、塩水遡上があったとしても「塩害」は起こらない(河川浸透水は耕作層に影響しない)と考えられますが、そのような理解でよろしいか。伺います。

もし、この「漏水対策工」が実施されている現在において「『漏水対策工』では塩害は防止できない」という結論を導く調査研究等があるのであれば、その資料を示して下さい。

(5) 上記のように、これまで、私たちが入手し検討した資料によると、「現状で河口堰のゲートの原則常時開放を行っても塩害は生じない」と判断されますがその理解でよろしいか。伺います。

「洪水時以外のゲート開放は『塩害』を生じる」という見解を維持されるなら、根拠を示して説明して下さい。

以上。

お忙しい時期とは存じますが、COP10 開催に合わせ回答・反論を公開したいと思いますので、9月30日(木)までに、下記の連絡先までメールまたは FAX で送付して下さい。よろしくお願いたします。

(連絡先) 市民による豊かな海づくり大会実行委員会事務局 武藤仁

mutohitoshi@yahoo.co.jp

FAX 058-242-3054

(携帯) 090-1284-1298